

2 台のスタインウェイ：細幅鍵盤 (左) と標準鍵盤を前にするピアニスト、シルヴィア・モラン
Photo: Lichtgut/Leif Piechowski

細幅鍵盤のグランドピアノ

シュトゥットガルト音楽アカデミーに最近、ヨーロッパでも珍しいコンサートグランドピアノが設置された。細幅鍵盤のスタインウェイだ。このピアノに潜むコンセプトは、プロだけでなく、アマチュアの音楽家にとっても興味深いものだ。／ ハンス・イェルク・ヴァングナー記者

規範 (Normen) はわれわれの生活を規定する。規範がなければ、過去 1 世紀半の技術的進歩はすべて水の泡になっていただろう。しかし、**誰かが伝統的な規範に逆らい、意図的に逸脱したらどうなるだろうか？**シュトゥットガルト音楽演劇大学のピアノ教育学教授ウルリケ・ヴォールヴェンダーのように。国立音楽演劇大学 (HMDK) にヨーロッパ初の幅の狭い鍵盤を持つスタインウェイのコンサートグランドピアノが導入されたのは、彼女の熱意のおかげである。

1 オクターブあたり 12 ミリ縮小された鍵盤幅は、ちょいとした小細工なんかではさらさららない、とヴォールヴェンダー教授は言う。なぜ教授は、同志のピアニスト、シルヴィア・モランとともにスタインウェイ D 型に、いわば代替義歯 (鍵盤) を装着するためにクラウドファンディング・キャンペーンを立ち上げたのか、その理由を列挙する。それは音の響きのためであり、ピアニストの健康のためであり、ジェンダーの平等のため... このジェンダーと聞いて、手を振り払い、昔ながらの伝統に意固地にこだわる人は、厳然たる事実に向けた方がいい。例えば、すべての主要なピアノコンクールが男性によって征服されているという事実だ。ルービンシュタイン、チャイコフスキー、ブゾーニを含む 15 の国際コンクールのうち 13 で女性は指を啜って後塵を拝している。第一位に輝いた女性ピアニストは、じつに 16 パーセントにすぎない。ただしバッハとモーツァルトのコンクールだけは男女比が逆転する傾向にある。これが意味するところは、大きな手=大きな成功。すなわち大きな不公平である。

「しかし、(細幅鍵盤を導入する目的は) より速く、より遠くへ、より高くということだけではありません」とヴォールヴェンダー教授は言う。つまりしんどい和音のかたまりを(細幅鍵盤なら) がっちり押さえることができる、それだけのことではない。

「ちょっと人差し指、中指、薬指を素早く動かしてみてください。そうです。そして今度は手を広げた状態でやってみましょう。」ピアノを弾いたことのない者でも、すぐに分かる。これは法外にやりにくい。ピアノ演奏にこれを当てはめると、中音部のバランスはひどく損われる。両端 (親指と小指) の音の重みは失われる。響きは平板になる。

世界的なスターでさえこの現象と苦闘しなければならない。ユジャ・ワンとダニール・トリフォノフを比較すればわかることだ。2人とも異星人のようなピアニストで、技術的にも音楽的にも等しく最高レベルにある。ところが例えばセルゲイ・ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番で、これでもかというほど限界を越えた、8音、9音、10音を叩く楽節を弾かせると、誰がライオンの前肢を持っているか、誰が持っていないかがわかってしまう。もしユジャ・ワンが細幅鍵盤で演奏したなら、この違いは解消されていただろう。「ユジャ・ワンのような人をここに呼ぶことができれば、それは私たちにとって重要なステップになるでしょう」とヴォールヴェンダー教授は言う。

このコンセプトを広めることは、ピアニスト、とりわけ女性ピアニストの健康にもプラスになるだろう。一部の女性のスパンは男性の平均値にはるかに及ばないからだ。教授は科学者として、長い間このテーマを研究してきた。明らかに、長期にわたる緊張は傷害を引き起こす。とりわけ鍵盤の中央で弾く場合、手首の関節が強く曲げられると、腱、筋肉、神経、関節に害毒となる。ピアノの歴史には、ピアニストの指が故障した例がたくさんある。ロベルト・シューマンやアレクサンドル・スクリャービン、レオン・フライシャーが、もっと幅の狭い鍵盤を使っていたなら、少なくとも一時的に、片手奏者の運命を避けられたかもしれない、と教授は推測する。

ヴォールヴェンダー教授が望むのは、この事例が普及して、より多くのピアノやグランドピアノにこのような鍵盤が取り付けられることだ。標準鍵盤と入替える形であれ、最初から製造する形であれ。過去4年間の経験から、希望は膨らんでいる。すでに4年間にわたってHMDKはシリウス6.0鍵盤を搭載したヤマハの小型グランドピアノを所有していたからだ。元々これはヴァイブリンゲンのピアノ職人ハラルド・シュレッカーが、コルプ（バーデン・ヴュルテンブルク州の町）のピアノ教師シモーネ・ライヒシュタットのために製作したもので、その後HMDKでこのピアノはさらに改良された。

教授が目ざしていたのは、手が小さい、ないし中ぐらいの大きさと、鍵盤にやっと手が届く人が狂喜したことだ。6.0インチ鍵盤に慣れるのに、まったく時間はかからない。そしてなんとも不思議なことに、シリウスで得たりラックスした弾き方が標準鍵盤でも持続するとプロもアマチュアも認めている。

もはや残っているのは、ただ一つの質問だけ。なぜシリウスという名前なのか？ヴォールヴェンダー教授によれば、長い間絶版になっていた絵本『星の妖精』に由来するという。さらに彼女の父親は「いつも私にそれを指さしてくれました——天空にまばゆく輝く冬の星を。」

アマチュア・ピアニストも楽器を改造できる

ヴァイブリンゲンのマスター・ピアノ製造業者ハラルド・シュレッカーは、この分野のパイオニアであり、すでに数台の楽器をシリウス6.0キーボードに改造している。ピアノの改造には約5,000ユーロ（約816万円）かかり、グランドピアノの場合はその2倍かかるという

(したがって約1,632万円)。一方、シュトゥットガルトで特注したスタインウェイは27,000ユーロ(約4,400万円)もかかったのでかなりの金額である。バイロイトのメーカー、シュタイングレーバー社も細幅鍵盤を製造する用意があるという。

初公開コンサートは4月13日(土)午後7時から。HMDKのシリウス6.0スタインウェイが初めて一般公開される。学生、教師およびゲストが演奏する。

さらに5月26日(日)午後5時から、第4回国際ストレートピアノフェスティバルの一環として、別のコンサートが開催される。

クラウドファンディングについて。このプロジェクトは、インスタグラムとフェイスブックの「シリウス6.0」で見ることができ、クラウドファンディングへのリンクも張ってある。現在、約6600ユーロの寄付が寄せられている。

https://www.hmdk-stuttgart.de/presse/aktuelles/news-aktuell-und-informativ/?tx_ttnews%5Btt_news%5D=572&cHash=14aa42f5e145bea6c08635a5d43422f